百々裏話（39）

おもてあきら

〔音曲道歌雑考―その一〕

室町後期以後に成立した能の伝書には、能や囃子や謡についての心得を和歌の形式に詠みこんだ歌がかなり入っている。古典文庫の『中世近世道歌集』（池田広司氏編）に収められているような道歌（道徳的・宗教的教訓歌）が口ずさまれていた世相の反映であろうか。

そうした音曲道歌は、もともと口誦に適するように作られたものであるのと、内容的にも平易で誰にでも作れる程度のものであった関係上、形が変えられたり、歌数が増補されたりしながら、主として伝書の一部に、稀には単独の写本として、漸次集成されてゆき、管見に入っただけでも、各種の伝書に多様な道歌が見出だされる。

今回から数回にわたって、その音曲道歌について紹介と考察を試みたい。

(1) **三十首系道歌**

いろいろ種類の多い音曲道歌の系統や前後関係を決定するのは容易でないが、比較的古い形のものではないかと思われる道歌群に、鼓関係の伝書（宮増弥左衛門小鼓伝書その他を合写した本）に収められている30首の道歌がある。この30首道歌を収めた本で私が調査し得たのは、鴻山文庫の『拍子秘書』能楽研究所の『袖かゞみ』等四種で、各本それぞれ異同があるが、それらを校合して得た結果に基づいて、読み易く漢字をあてた形を示すことにしたい。他種の道歌を示す場合も同様である。（上の数字は当該道歌群での歌順、下の数字は本稿掲載道歌の通し番号）

1、音曲の道（種）とやならん藻塩草
　かき集めたる手ずさみの跡　（一）

2、口と舌心の三つのかなひてぞ
　口舌心の音曲といふ　（二）

3、声のうら表（と）をいふを知らずして
　章を分けざる音曲は憂し　（三）

4、音曲はただ大竹のごとくなり（にて）
　直ぐに清くてふし少なかれ　（四）

5、謡ふ時身なり顔持ち大事なり
　常に鏡に向かひても見よ　（五）

6、音曲に扇拍子ぞ大事なる
　無用を打てば肝要は無し　（六）

7、音曲は先づ祝言をもっぱらに
　さて幽玄に恋慕・哀傷　（七）

8、堪能のわざにはなにと謡ふべき
　人の所望は闌曲をせよ　（八）

9、さしごとさしごゑ替る事なれば
　ことばと声とかはりあるべし　（九）

10、くり上げの揺りと一声揺るこゑと
　似たる事にて似たるにはなし　（一〇）

11、論議こそやすく聞えて大事なれ
　問ふに答ふる人は少なし　（一一）

12、切り拍子切らず拍子にみな謡ふ
　切によりたる儀理は知らずや　（一二）

13、酒盛のまだ始まらぬそのさきに
　召さればやがて甲乙（かんおつ）を知れ　（一三）

14、謡ふ時拍子ばかりを音取りにて
　手吹きだてして吹くな尺八　（一四）

15、我が声を三色四色（みいろよいろ）につかひ分け
　心安くも音曲をせよ　（一五）

16、暁に限らぬものをつかふこゑ
　こゑに心をゆるすべからず　（一六）

17、大きにてよからんこゑは小さくて
　小さく願ふ字は大きなり　（一七）

18、小音のこゑのごとく（よはく）はなかなかに
　言ふは言はぬに劣るとぞ聞く　（一八）

19、能うたひ小路（こうぢ）うたひは似たるべし
　座敷うたひはかはりあるべし　（一九）

20、しらことのこえとことばのこわざし（さま）を
　心知りてぞ言ふ人のなき　（二〇）

21、音曲の直ぐによきとはなにを言ふ
　字なまりといふことは稀なり　（二一）

22、文盲の身にはかなはぬわざなれや
　字の扱ひの音曲の道　（二三）
23、生得（しやうとく）に濁れる字をば濁らせよ
　清（す）む字を濁すことぞはかなき　（二三）
24、あたる字をあたると知らで謡ふ人
　必ずあとの字は訛るべし　（二四）
25、四座の内いづれよしあし無益（やく）なり
　節曲（ふしぐせ）知らば助音をばせよ　（二五）
26、初めたる所にゆかば音曲に
　主人の名字名のり問ふべし　（二六）
27、口の内重き軽きの心得は
　心の悟り舌のさへづり　（二七）
28、都より下りて人の謡ふとも
　聞き手によりて曲はあらじな　（二八）
29、無拍子を打ちたるほどは音曲の
　道に入らぬ心とを知れ　（二九）
30、天地をば阿吽（あうん）の二字にかたどれば
　阿吽の心物（あり）ごとにしれ　（三〇）

この30首を全部含み、左記の七首が新たに加わって全37首の形の道歌群が、鴻山文庫蔵の謡伝書『風曲集』に見られる、歌の順序は通し番号で言うと、一〜一六、二九、三一、一七、二〇、一八、三二、一九、三三、二六、二四、二五、二三、二七、二四、三三、三〇、三六、三二、三四の順となり、後半部がかなり違っている。

18、さしごゑもさしごとまでも鼓をば
　捨てぬ道理を知らぬはかなさ　（三一）
22、わが声の出でばつかひて色をなせ
　出でずばこゑにつかはれやせん　（三二）
24、京ゐなかかはりのあらん耳そとて
　筋なく謡ふことなかるべし　（三三）
26、その人の弟子といひたるばかりにて
　なさぬ謡に師の恥をいふ　（三四）
29、わが心ただ井の内の蛙にて
　海川知らで偏執（へんしふ）すな　（三五）
34、音曲に人をあなづる事なかれ
　壁に耳あり石に口あり　（三六）
37、天地を阿吽の二字にかたどれば
　やあの二字をば誰か知るべし　（三七）

右の『風曲集』の37首の形と、前記の30首の形との先後関係については、37首から7首を除いたのが30首の形とも考え得るが、30首が原形で七首を増補したものと考えたい。30首道歌を収める諸本はいずれも集鼓之和歌と題する鼓道歌30首を続けて収めているが、問題の七首のうち三を除く六首はその集鼓之和歌から、或はそのまま、或は一部を改変して移したものと認められるからである。譬えば三七の歌は、集鼓之和歌29首目の、

　天地をば阿吽の二字にかたどれば
　やあの声より余の声はなし　（三八）

と酷似するが、三七の形では意をなさず、鼓の掛声の「ヤア」のことを言う三八が原形で、三七が変形に相違あるまい。

この『風曲集』の37首の形から、三三・三九の二首を除き、末に

　音曲は序破急こそは極めなれ
　　また肝要は四十余の文字　（三九）

の一首を加えて36首とした形が、三省堂「国語国文学研究史大成」の『謡曲狂言』に翻印されている『花伝髄脳記』や、鴻山文庫蔵の『節章句秘伝之抄』等に見えている。この方は、歌順の一致、30首道歌との関係から見て『風曲集』の37首の形に基づく改変であることが、ほとんど確実であろう。

以上に言及した30首系の道歌群は、諸本ともに、歌の前に、

　凡音曲之道強依強尋出述之於三十一字
　是則為愚家之童蒙歟　以口舌心之三為此
　道之本源而已

とか、それに類似した文句を持っていて、同系統であることを示しているが、『袖かゞみ』は別に「宮増弥左衛門音曲伝哥密書抜書」とし、『風曲集』は「観世世阿弥作之」としている。世阿弥というのは全く信じ難いが、宮増弥左衛門の「伝哥」とするのは、真実に近いのかも知れない。　（41・6・3）